



ISSN: 2434-8821

JAAL IN JACET
PROCEEDINGS

VOLUME 1

ISSN 2434-8821

JAAL in JACET Proceedings

Volume 1

The First JAAL in JACET Conference (JAAL in JACET 2018)

1st December 2018, Takachiho University, Tokyo, Japan



Japan Association of Applied Linguistics in Japan Association of College English Teachers
(JAAL in JACET) Proceedings, Volume 1

The First JAAL in JACET Conference (JAAL in JACET 2018), 1st December 2018,
Takachiho University, Tokyo, Japan

Published by the Japan Association of College English Teachers (JACET)

First published on 31st March 2019

ISSN: 2434-8821

Cite as: *JAAL in JACET Proceedings, 1*

Copyright © 2019 by JACET

All rights reserved. No part of this publication may be reproduced or republished in any
form without permission in writing from JACET.

The articles published herein do not reflect the opinions of JACET.

JACET 関東支部特別研究プロジェクト⑥

—大学における英語教員養成コアカリキュラムの実態調査—

山口 高領* 飯田 敦史** 多田 豪*** 青田 庄真****
新井 巧磨***** 鈴木 健太郎***** 木村 松雄*****

*立教女学院短期大学
takane46@gmail.com
**群馬大学
a.iida@gunma-u.ac.jp
***東邦大学
iekoshinbeegprx@gmail.com
****筑波大学
aota.shoma.fu@u.tsukuba.ac.jp
*****早稲田大学
tack@aoni.waseda.jp
*****共栄大学
k-suzuki@kyoei.ac.jp
*****青山学院大学
bluemountain333@rc4.so-net.ne.jp

要旨

本研究の目的は、2019 年度から実施されるコアカリキュラムの求める到達目標に対する大学の英語教職課程担当者の見解を主に量的な観点から把握することである。中学校・高等学校教員（英語）の一種免許資格を通学課程によって取得可能な全国の 306 大学にアンケート調査を実施した（回収率 49%）。また、小学校の英語教職課程を有する場合には、小学校教職課程についても回答を依頼した。調査内容としては、各到達目標について、履修生の多くが卒業までにどの程度到達すると見込めるかを 5 件法で尋ね、自由記述欄に回答を求めた。中・高等学校の教職課程では全 37 項目を、小学校の教職課程では全 26 項目を尋ねた。分析には、記述統計からの分析とクラスター分析を用いた。その結果、中・高等学校の教職課程では、3 つの因子により特徴づけられる 4 つのクラスターが見いだせ、27%が到達目標を達成できると考えていることが判明した。小学校の教職課程では 9%が到達目標を達成できると考えていることが判明した。

キーワード：コアカリキュラム、小学校教員養成、中・高等学校教員養成、到達目標、教職課程

1. 研究背景

近年のグローバル化の進展に伴い、日本においても外国人の観光客・労働者、留学生の数は増加する方向にシフトし、国内でも外国語、とりわけ英語運用能力の必要性が高まっている。それに伴い、日本の英語教育も変革期を迎え、2020 年の小学校の英語教科化に加え、2019 年度より教員養成にコアカリキュラム¹が導入される。

コアカリキュラムは、事前の様々な調査に基づいて提案されたものであるが（東京学芸大学, 2016, 2017）、その実効性や課題点を見極めるためには、実際の教員養成課程や教員研修における実証的な調査が重要となる。しかし、そうした調査の数は現時点で限られている（内野・酒井, 2018）。とりわけ、教員養成システムを担う大学、国、自治体の今後取りうる有効なアプローチへの示唆を得るためにも、現状の教員養成課程の抱える

課題点とその原因を具体化・整理することが重要になる。

そのための第一歩として、本研究では、2019 年度から実施されるコアカリキュラムの求める到達目標に対し、大学の英語教職課程担当者の見解を尋ね、実態調査として現状と課題を把握することを目的とした。

2. 調査の概要

2.1 調査対象

調査対象は、中学校・高等学校教員（英語）の一種免許資格を通学課程によって取得可能な全国の全 306 大学である²（文部科学省, 2018）。このような調査対象にした理由は、通学課程のみの一種免許取得大学に限った調査が、最初の調査として適切と考えたためである。306 大学の中で小学校の教職課程を併設している大学

には、小学校のコアカリキュラムの求める到達目標に対する質問も実施した。

2.2 調査項目

アンケートでは、2019 年度以降の大学の教職課程修了時に、コアカリキュラムの各到達目標について、多くの履修生が到達する可能性を 5 件法で質問した。アンケート項目は、文部科学省の教員養成部会の文書「外国語（英語）コアカリキュラム案について」に掲載されている全ての到達目標を対象とした（文部科学省, 2017）。本調査では、自由記述解答欄も設けた。その分析結果は、飯田他（in press）にある。

2.3 依頼方法と回収率

各大学で英語の教職課程について最も詳しい担当者に郵送で回答を依頼し、小学校と中高の教職課程それぞれでは回答者が異なっても良いこととした。いずれの依頼の場合にも、特定の大学の回答結果がわかるような公表はしないことを明記した。回答者は、用紙記入もしくは web 上での回答のいずれかを選択した。調査期間は 6 月 25 日から 9 月 30 日までで、回収率は 49%（306 大学中 149 大学）であった。

2.4 分析対象データ

コアカリキュラムの各到達目標についての 5 件法（1: 全くそう思わない・2: あまりそう思わない・3: どちらでもない・4: ややそう思う・5: とてもそう思う）データを分析対象とした。項目数は中高の教職課程用では 37 項目、小学校の教職課程用では 26 項目であった。

2.5 分析方法

中高と小学校の教職課程それぞれについて、まず記述統計結果から全体の傾向を提示した。さらに、下位集団の特徴を明らかにするために、可能な場合には探索的因子分析を行った後に、クラス分析を実施した。

3. 中・高等学校教員養成コアカリキュラム

3.1 コアカリキュラムの構成

中・高等学校の教員養成コアカリキュラムは、2 つの階層（大・小）から成る。2 つの階層大それぞれに階層小があり、階層小の中に各到達目標が示されている（表 1 参照）。なお、各到達目標に対応する番号は分析用に本調査が独自に付与したものである。

表 1. 中・高等学校用教職課程の到達目標

[1] 英語科の指導法	
「カリキュラム／シラバス」	
4-1-1	中学校及び高等学校の外国語（英語）の学習指導要領について理解している。
4-1-2	中学校及び高等学校の外国語（英語）の教科用図書について理解している。
4-1-3	学習指導要領の「知識・技能」、「思考力・判断力・表現力等」、「学びに向かう力等」の 3 つの資

質・能力（以下、「3 つの資質・能力」という）とともに、領域別の学習到達目標の設定、年間指導計画、単元計画、各授業時間の指導計画について理解している。	
4-1-4	小学校の外国語活動・外国語の学習指導要領や教科用図書等の教材、並びに小・中・高等学校を通じた英語教育の在り方の基本について理解している。
「生徒の資質・能力を高める指導」	
4-2-1	聞くことの指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-2	読むことの指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-3	話すこと（やり取り・発表）の指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-4	書くことの指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-5	複数の領域を統合した言語活動の指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-6	英語の音声的な特徴に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-7	文字の指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-8	語彙・表現に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-9	文法に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-10	異文化理解に関する指導について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-11	教材及び ICT の活用について理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-12	英語でのインタラクションについて理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-13	ALT 等とのチーム・ティーチングについて理解し、授業指導に生かすことができる。
4-2-14	生徒の特性・習熟度への対応について理解し、授業指導に生かすことができる。
「授業づくり」	
4-3-1	学習到達目標に基づく授業の組み立てについて理解し、授業指導に生かすことができる。
4-3-2	学習指導案の作成について理解し、授業指導に生かすことができる。
「学習評価」	
4-4-1	観点別学習状況の評価とそれに基づく評価基準の設定や評定への総括について理解し、指導に生かすことができる。
4-4-2	言語能力の測定と評価（パフォーマンス評価等を含む）について理解し、指導に生かすことができる。
「第二言語習得」	
4-5-1	第二言語習得理論とその活用について理解し、授業指導に生かすことができる。
[2] 英語科に関する専門的事項	
「英語コミュニケーション」	
5-1-1	様々なジャンルや話題の英語を聞いて、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。
5-1-2	様々なジャンルや話題の英語を読んで、目的に応じて情報や考えなどを理解することができる。

5-1-3	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で話すこと（やり取り・発表）ができる。
5-1-4	様々な話題について、目的や場面、状況等に応じて英語で書くことができる。
5-1-5	複数の領域を統合した言語活動を遂行することができる。
「英語学」	
5-2-1	英語の音声の仕組みについて理解している。
5-2-2	英語の文法について理解している。
5-2-3	英語の歴史的変遷及び国際共通語としての英語の実態について理解している。
「英語文学」	
5-3-1	文学作品において使用されている様々な英語表現について理解している。
5-3-2	文学作品で描かれている、英語が使われている国・地域の文化について理解している。
5-3-3	英語で書かれた代表的な文学について理解している。
「異文化理解」	
5-4-1	世界の文化の多様性及び異文化コミュニケーションの現状と課題を理解している。
5-4-2	多様な文化的背景を持った人々との交流を通して、文化の多様性及び異文化交流の意義について体験的に理解している。
5-4-3	英語が使われている国・地域の歴史・社会・文化について基本的な内容を理解している。

3.2 回答の平均値・標準偏差

中・高等学校の教員養成について尋ねた質問項目に対する回答の平均値・標準偏差を付録 1 に示す。回収した 149 の大学のうち欠損値を含むデータ 8 つをリストワイズで除去した ($n=141$)。

37 項目の各平均値は、項目 4-4-2 の 3.62 から項目 4-3-2 の 4.29 の間であった。この結果は、今回の回答者の全体の傾向として、どの項目も「到達できる」とまでの判断には至っていないものの、「どちらかといえば到達できるのではないかと考えたことを示している。

回答の平均値が 4.00 以上の項目「到達できるとやや思う」は 14 項目であった。これら 14 項目の中に、「授業づくり」の全 2 項目については含まれたが、「学習評価」、「第二言語習得」、「英語コミュニケーション」、「英語文学」についてはどの項目も含まれなかった。

3.3 探索的因子分析とクラスタ分析

前セクション 3.2 だけでは全体の傾向以上のことを示していない。そこで全体を妥当にグループ化してその特徴を明らかにするために以下の分析を行った。

37 項目の潜在因子に基づき各大学の回答傾向を検証するために探索的因子分析を行った。KMO 標本妥当性の測度は.94 であり、サンプルサイズは十分大きいことと、Bartlett の球面性検定は $\chi^2(703) = 5,742.02, p < .001$ であり、項目間に有意な相関関係があることを確認した。最尤法・Oblique 回転による因子分析の結果を表 2 に示す。平行分析の結果に基づき 3 つの因子を抽出し、

分散の 66%が説明された。各因子を構成する項目の内的一貫性 (Cronbach's α) は.95 以上であった (表 2 参照)。

質問項目の内容に基づき各因子を以下の通りラベル付けした。ただし項目 4-5-1「第二言語習得理論の理解と指導」の因子負荷量は因子 3 を構成していると判断できるほど高くないため考察から除外した。

- 因子 1「カリキュラムやシラバスに基づく授業作成力・生徒の資質・能力を高める指導力」
- 因子 2「英語科に関する専門的事項（英語学・英語で書かれた文学・異文化理解）の理解力」
- 因子 3「(英語で授業を行うための履修生の) 英語コミュニケーション力」

表 2. 因子のパターン行列

質問項目	因子 1 ($\alpha = .97$)	因子 2 ($\alpha = .95$)	因子 3 ($\alpha = .95$)
Q4-2-1	.93	-.07	.04
Q4-2-2	.90	.04	-.04
Q4-2-3	.89	-.19	.12
Q4-2-6	.82	.09	-.10
Q4-1-2	.81	-.03	.00
Q4-2-4	.80	.08	.04
Q4-1-1	.79	-.02	-.03
Q4-2-8	.79	.17	-.07
Q4-2-11	.78	-.04	-.02
Q4-2-5	.78	-.13	.16
Q4-2-7	.77	.07	-.08
Q4-2-9	.76	.20	-.08
Q4-3-2	.70	.04	.06
Q4-2-10	.67	.22	-.15
Q4-1-3	.65	.01	.03
Q4-2-12	.64	.03	.23
Q4-3-1	.64	-.01	.18
Q4-2-13	.62	.02	.13
Q4-2-14	.60	.15	.00
Q4-4-2	.49	.14	.24
Q4-4-1	.47	.16	.21
Q4-1-4	.41	-.10	.34
Q5-3-3	-.06	.91	.08
Q5-3-1	.03	.91	.02
Q5-3-2	.00	.85	.05
Q5-4-3	.13	.60	.14
Q5-2-1	.19	.56	.10
Q5-4-1	.24	.55	.07
Q5-2-2	.26	.49	.20
Q5-4-2	.17	.47	.09
Q5-2-3	.29	.46	.14
Q5-1-3	.04	-.03	.94
Q5-1-1	.00	.03	.93
Q5-1-4	.01	.16	.81
Q5-1-5	.04	.00	.81
Q5-1-2	.01	.21	.75
Q4-5-1	.29	.20	.36

次に、各因子の得点を変数としたクラスタ分析を行うことで各大学の回答パターン類似性を検証した (図 1 参照)。クラスタ数を Calinski-Harabasz (CH) インデックスに基づき判断し、図 2 に示す通り 4 クラス

タに分割することが妥当であることを確認した。各クラスタの特徴を図3に示す。

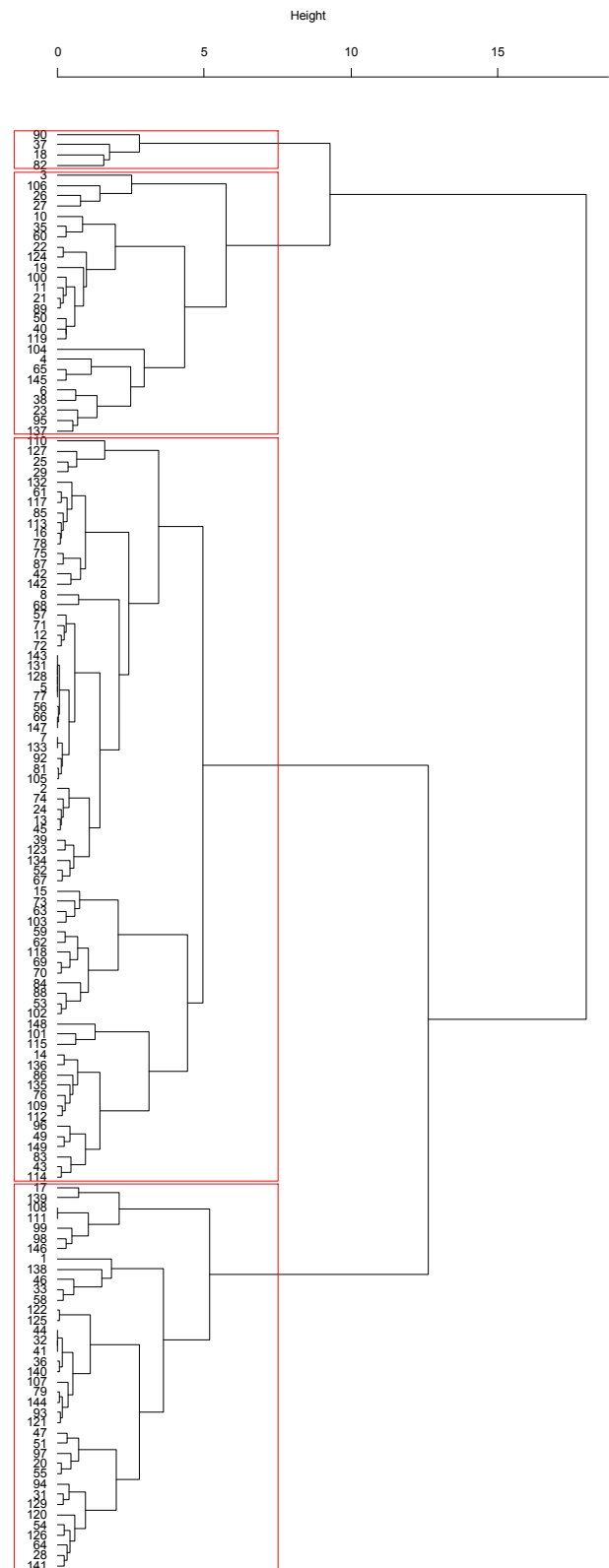


図 1. 中高教職課程に対し類似の回答パターンを示したクラスタ。クラスタ化にはWard法およびユークリッド距離を用いた。上からクラスタ1からクラスタ4とする。

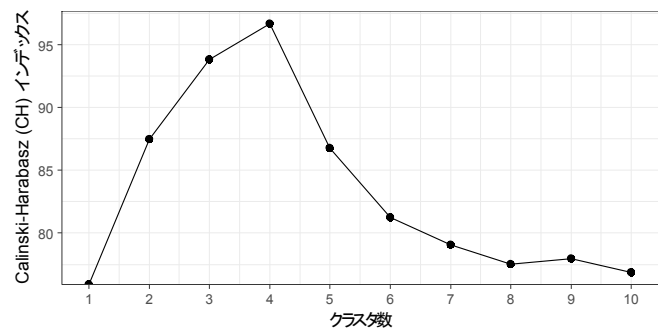


図 2. 中・高等学校用教職課程に対する回答パターンのクラスタ数. CH インデックスが最大となるクラスタ数を採用した。

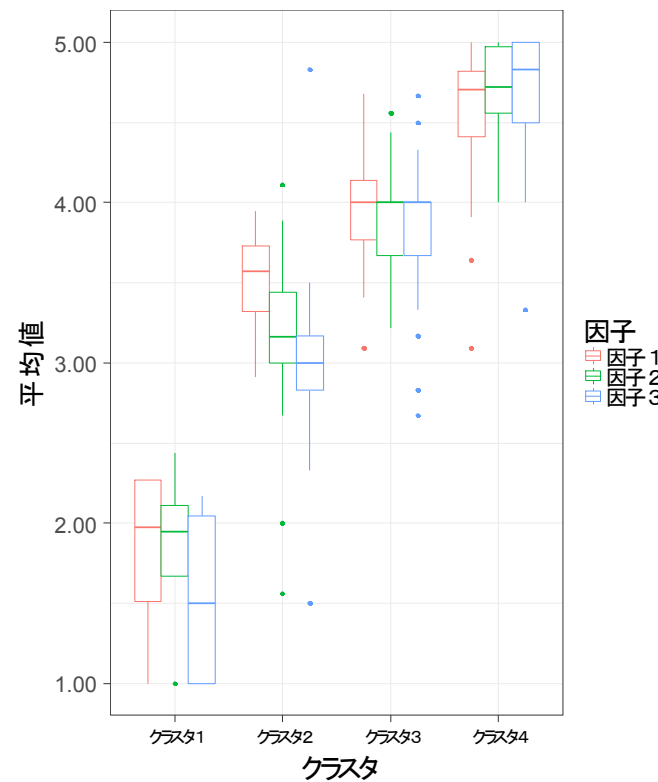


図 3. 各クラスタの特徴。

クラスタ1の4大学（全体の中で3%）は3因子すべてに対し、中央値が2.00以下という低い評価値をつけたグループである。特に因子3への期待度が低く、次いで因子2、因子1の順になっている。クラスタ2の26大学（18%）は因子1への期待度を、因子2および因子3よりも高く評価したグループである。クラスタ3の73大学（52%）は、各因子の中央値が4.00付近である点を踏まえると、「やや期待している」グループである。クラスタ4の38大学（27%）は、各因子の中央値が4.50を超えており、「期待している」グループと言える。

3.4 小結

今回得られた回答大学の27%が、ほぼすべての項目

に対して、コアカリキュラムに対応した、中・高等学校用英語教職課程において多くの学生が卒業までに目標に到達できると考えていることが判明した。そこまでの自信をもって判断できない回答大学が残りの 73%を占めた。その中の多くの大学では、各因子いずれかに課題があると考えていることが分かった。特に平均値が低い 2 つのクラスは、因子 3「(英語で授業を行うための履修生の) 英語コミュニケーション力」が低いという傾向があると判明した。

4. 小学校教員養成コアカリキュラム

4.1 コアカリキュラムの構成

小学校の教員養成コアカリキュラムは、3 つの階層（大・中・小）から成立している。階層大は 2 つ、それぞれに階層中が含まれ、階層中は階層小を含んでいる。各階層小に到達目標が複数示されている（表 3 参照）。

表 3. 小学校用教職課程の到達目標

[1] 外国語の指導法	
「授業実践に必要な知識・理解」	
(1) 小学校外国語教育についての基本的な知識・理解	
2-1-1-1	小学校外国語教育の変遷、小学校の外国語活動・外国語、中・高等学校の外国語科の目標・内容について理解している。
2-1-1-2	主教材の趣旨・構成・特徴について理解している。
2-1-1-3	小・中・高等学校の連携と小学校の役割について理解している。
2-1-1-4	様々な指導環境に柔軟に対応するため、児童や学校の多様性への対応について、基礎的な事柄を理解している。
(2) 子どもの第二言語習得についての知識とその活用	
2-1-2-1	言語使用を通して言語を習得することを理解し、指導に生かすことができる。
2-1-2-2	音声によるインプットの内容の類推から理解へと進むプロセスを経ることを理解し、指導に生かすことができる。
2-1-2-3	児童の発達段階を踏まえた音声によるインプットの在り方を理解し、指導に生かすことができる。
2-1-2-4	コミュニケーションの目的や場面、状況に応じて意味のあるやり取りを行う重要性を理解し、指導に生かすことができる。
2-1-2-5	受信から発信、音声から文字へと進むプロセスを理解し、指導に生かすことができる。
2-1-2-6	国語教育との連携等によることばの面白さや豊かさへの気づきについて理解し、指導に生かすことができる。
「授業実践」	
(1) 指導技術	
2-2-1-1	児童の発話につながるよう、効果的に英語で語りかけることができる。
2-2-1-2	児童の英語での発話を引き出し、児童とのやり取りを進めることができる。

2-2-1-3	文字言語との出合わせ方、読む活動・書く活動への導き方について理解し、指導に生かすことができる。
(2) 授業づくり	
2-2-2-1	題材の選定、教材研究の仕方について理解し、適切に題材選定・教材研究ができる。
2-2-2-2	学習到達目標に基づいた指導計画（年間指導計画・単元計画・学習指導案、短時間学習等の授業時間の設定を含めたカリキュラム・マネジメントなど）について理解し、学習指導案を立案することができる。
2-2-2-3	ALT 等とのチーム・ティーチングによる指導の在り方について理解している。
2-2-2-4	ICT 等の効果的な活用の仕方について理解し、指導に生かすことができる。
2-2-2-5	学習状況の評価（パフォーマンス評価や学習到達目標の活用を含む）について理解している。

[2] 外国語に関する専門的事項	
「授業実践に必要な英語力と知識」	
(1) 授業実践に必要な英語力	
3-1-1-1	授業実践に必要な聞く力を身に付けている。
3-1-1-2	授業実践に必要な話す力（やり取り・発表）を身に付けている。
3-1-1-3	授業実践に必要な読む力を身に付けている。
3-1-1-4	授業実践に必要な書く力を身に付けている。
(2) 英語に関する背景的な知識	
3-1-2-1	英語に関する基本的な事柄（音声・語彙・文構造・文法・正書法等）について理解している。
3-1-2-2	第二言語習得に関する基本的な事柄について理解している。
3-1-2-3	児童文学（絵本、子ども向けの歌や詩等）について理解している。
3-1-2-4	異文化理解に関する事柄について理解している。

4.2 回答の平均値・標準偏差

小学校の教職課程について尋ねた質問項目に対する回答の平均値・標準偏差を付録 2 に示す。回収した 70 の大学のうち欠損値を含むデータ 4 つをリストワイズで除去した ($n = 66$)。

26 項目の各平均値は、項目 2-2-1-2 と 3-1-1-2 の 3.55 から項目 2-1-2-4 の 4.04 の間に現れた。この結果は、今回の調査回答者の傾向として、「どちらかといえば到達できるのではないか」という判断を下したことを示している。回答の平均値が 4.00 以上の項目「到達できるとやや思う」は、項目 2-1-1-1、2-1-1-2、2-1-1-3、2-1-2-1 と 2-1-2-4 の全 5 項目であった。これら 5 項目は、「外国語の指導法」の「授業実践に必要な知識・理解」に含まれる一方で、「授業実践」や「授業実践に必要な英語力と知識」に含まれるどの項目も平均値が 4.00 以上を超えなかった。

4.3 クラスタ分析

26 項目の潜在因子に基づく各大学の回答傾向を検証するため探索的因子分析を行ったが、平行分析を行っ

たところ意味のある因子は抽出されなかった。したがって素点を変数としたクラスタ分析を行うことで各大学の回答パターンの類似性を検証した（図4参照）。クラスタ数をユークリッド距離に基づき4に設定した際の各クラスタの特徴を図5に示す。

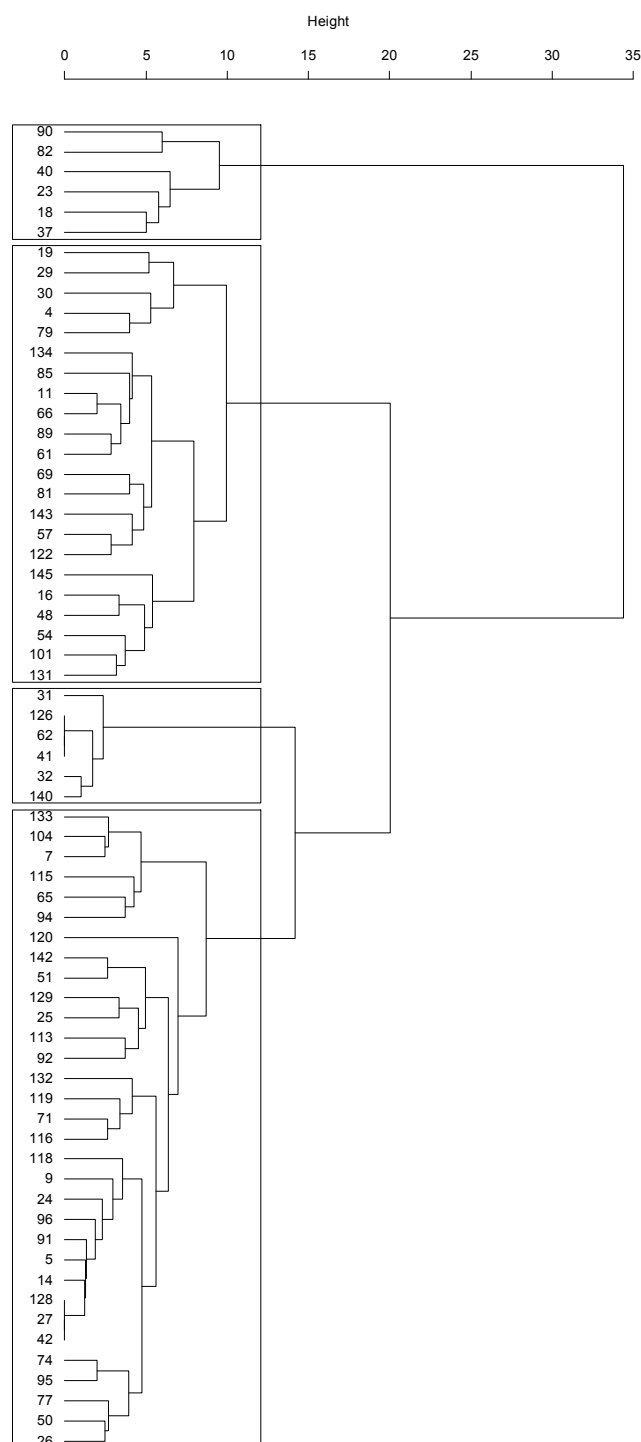


図4. 小学校教職課程に対し類似の回答パターンを示したクラスタ。クラスタ化にはWard法およびユークリッド距離を用いた。上からクラスタ1からクラスタ4とする。

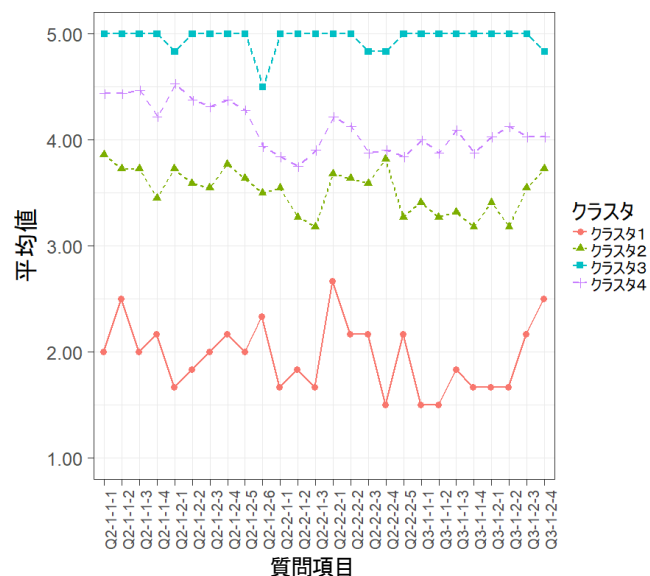


図5. 各クラスタの特徴

各クラスタに属する大学数は、クラスタ1が6大学（全体の中で9%）、クラスタ2が22大学（33%）、クラスタ3が6大学（9%）、クラスタ4が32大学（48%）となった。

クラスタ3が、どの項目平均値も他のクラスタのものより高く、各項目平均値は4.50から5.00の間に現れた。これは、全体の9%の6大学が各到達目標に対して「到達できる」と考えていることを示す。

クラスタ4が次いで各平均値が高く、各項目平均値は3.75から4.53の間に現れた。項目平均値が4.00未満だった項目は、項目2-1-2-6、2-2-1-1、2-2-1-2、2-2-1-3、2-2-2-3、2-2-2-4、2-2-2-5、3-1-1-2、3-1-1-4といった全9項目であった。これらの9項目は、「子どもの第二言語習得についての知識とその活用」の1項目、「指導技術」の全3項目、「授業づくり」の3項目、「授業実践に必要な英語力」の2項目に該当する。これら9項目を除けば、クラスタ4という全体の48%の32大学が「到達できる」と「やや」考えていることを示す。

クラスタ2が次に各平均値が高く、各項目平均値は3.18から3.86の間に現れた。これは、全体の33%の22大学が各到達目標に対して「どちらかといえば到達できるかもしれない」と考えていることを示す。

クラスタ1が最も各平均値が低く、各項目平均値は1.50から2.67の間に現れた。項目平均値が2.00「あまり到達できるとは思わない」未満の項目は、全12項目であった。内訳は、項目2-1-2-1、2-1-2-2が「第二言語習得の知識・活用」、項目2-2-1-1、2-2-1-2、2-2-1-3が「指導技術」、項目2-2-2-4が「授業づくり」、項目3-1-1-1、3-1-1-2、3-1-1-3、3-1-1-4が「授業実践に必要な英語力」、項目3-1-2-1、3-1-2-2が「英語に関する背景的な知識」に属している。全体の9%の6大学を占めるクラスタ1の特徴をまとめれば、およそ半数の項目に対して「到達できるとは思わない」と考え、残りの半数の項目に対し

て「どちらかといえば到達できるとは思わない」と考えている。

4.4 小結

今回得られた回答大学の9%が、ほぼすべての項目に対して、コアカリキュラムに対応した、小学校用英語教職課程において多くの学生が卒業までに到達できると考えていることが判明した。そこまでの自信をもって判断できないと回答した大学が残りの91%を占めた。

5. おわりに

本研究は、2019年度から大学の英語教職課程で導入されるコアカリキュラムの求める到達目標に対する教職担当者の傾向を調査するものである。本調査で得られた結果は、2019年度から始まる教職課程履修者の各到達目標に対する見込みであるため、実際の到達の度合いは数年経過しないと正確なものはわからないという限界がある。アンケート回収率に関しても、中学校・高等学校は、外国語（英語）一種免許を通学課程にて取得可能な大学の約50%を占める一方、小学校については、依頼した大学の中で小学校教職課程があるものに限定された。

本研究にはこうした限界点はあるものの、コアカリキュラム運用前の予測として、中・高等学校用教職課程については27%、小学校用教職課程については9%が、およそ各到達目標に対して達成の見込みを持っていることが判明した。調査時点からコアカリキュラムが適用された教職課程の開始まで約半年の準備期間はあるものの、再課程認定申請時期（2018年3～4月）が既に過ぎた時点でのアンケート調査結果であることを考慮すると、これらの目標達成の見込みは決して高いとは言えない。

また、そこまでの見込みを持っていない教職課程の分析を通じ、中・高等学校用教職課程については特に「英語で授業を行うための履修生の英語コミュニケーション力」育成が、小学校用教職課程については特に、「授業実践に必要な知識・理解」よりも、「授業実践」や「授業実践に必要な英語力と知識」に課題を感じていることが多いことが判明した。各教職課程が抱える問題・課題は様々であるかもしれないが、こうした課題を共有しているのであれば、まずこれらの課題解決に向けて取り組むことが全般的な到達目標の度合いを上げることに寄与する可能性が、今回の調査から示唆される。なお、こうした課題が生じている具体的な理由や、到達目標を達成させるための大学での取り組みの一部などが、今回の調査の自由記述回答の分析（飯田他, in press）から得られている。

今後は、本調査の結果を踏まえ、調査対象を拡大し、コアカリキュラム導入時における問題点の解明、コアカリキュラム導入4年後、すなわち、初の修了者が出た時点での教職課程の成果検証、といった縦断的研究を実施していく。そうすることで、本調査の目的の延長線

上にある、英語教職課程における指導の一層の充実化に結びつくことが期待される。

注

¹ 本稿では、「教員養成部会（第98回）配付資料 外国語（英語）コアカリキュラム案」（文部科学省, 2017）に従って、「コアカリキュラム」という表記を使用している。
² 文部科学省（2018）によると、2017年4月1日現在にて、中学校・高等学校教員（英語）の免許資格を取得することのできる大学は、通学課程と通信課程に分かれ、通学課程では、一種免許資格を取得可能な大学の他に、二種免許資格を取得可能な短期大学、専修免許資格を取得可能な大学院がある。通信課程での免許資格を取得可能な大学数は11である。

謝辞

本研究の遂行にあたっては、各大学の教員養成課程ご担当の先生方からアンケート調査を通して多大なご協力をいただきました。ご協力に深く御礼申し上げます。また、匿名の査読者から有益なコメントを頂いたことにも感謝します。

参考文献

飯田敦史・山口高領・奥切恵・青田庄真・新井巧磨・鈴木健太郎・多田豪・辻りこ・中竹真依子・濱田彰・藤尾美佐・米山明日香・木村松雄. (in press). 「教員養成課程コアカリキュラムの実態調査—大学教職担当者の見解から—」『JACET 関東支部紀要』6.
文部科学省. (2017). 『外国語（英語）コアカリキュラム案について』 . Retrieved from http://www.mext.go.jp/b_menu/shingi/chukyo/chukyo3/002/siryo/attach/1388110.htm
文部科学省. (2018). 『中学校・高等学校教員（英語）の免許資格を取得することのできる大学』 . Retrieved from http://www.mext.go.jp/a_menu/shotou/kyoin/daigaku/detail/1287069.htm
東京学芸大学. (2016). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成27年度報告書』 . Retrieved from <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html>
東京学芸大学. (2017). 『文部科学省委託事業「英語教員の英語力・指導力強化のための調査研究事業」平成28年度報告書』 . Retrieved from <http://www.u-gakugei.ac.jp/~estudy/report/index.html>
内野駿介・酒井英樹. (2018). 「中・高等学校教員養成課程における学生のニーズ分析—中・高等学校教員養成課程外国語（英語）コア・カリキュラムの点から—」『信州大学教育学部研究論集』12, 75–90.

付録

付録1. 中・高等学校用教職課程の到達目標の記述統計

目標	M	SD	目標	M	SD
[1] 英語科の指導法					
「カリキュラム／シラバス」					
4-1-1	4.26	0.74	4-1-3	3.91	0.82
4-1-2	4.16	0.76	4-1-4	3.94	0.75
「生徒の資質・能力を高める指導」					
4-2-1	4.10	0.72	4-2-8	4.06	0.71
4-2-2	4.16	0.74	4-2-9	4.13	0.79
4-2-3	4.09	0.77	4-2-10	3.95	0.74

4-2-4	3.97	0.79	4-2-11	3.91	0.85
4-2-5	3.96	0.83	4-2-12	4.06	0.82
4-2-6	4.00	0.79	4-2-13	3.68	0.80
4-2-7	3.89	0.82	4-2-14	3.72	0.84
「授業づくり」					
4-3-1	4.09	0.76	4-3-2	4.29	0.69
「学習評価」					
4-4-1	3.71	0.84	4-4-2	3.62	0.91
「第二言語習得」					
4-5-1	3.94	0.82			
[2] 英語科に関する専門的事項					
「英語コミュニケーション」					
5-1-1	3.85	0.92	5-1-4	3.76	0.96
5-1-2	3.94	0.91	5-1-5	3.73	0.93
5-1-3	3.81	0.89			
「英語学」					
5-2-1	3.91	0.86	5-2-3	3.91	0.87
5-2-2	4.02	0.79			
「英語文学」					
5-3-1	3.74	0.94	5-3-3	3.68	0.99
5-3-2	3.87	0.84			
「異文化理解」					
5-4-1	4.06	0.82	5-4-3	3.96	0.84
5-4-2	4.05	0.87			

付録2. 小学校用教職課程の到達目標の記述統計

目標	M	SD	目標	M	SD
[1] 外国語の指導法					
「授業実践に必要な知識・理解」					
(1) 小学校外国語教育についての基本的な知識・理解					
2-1-1-1	4.08	1.00	2-1-1-3	4.05	0.94
2-1-1-2	4.08	0.91	2-1-1-4	3.85	0.97
(2) 子どもの第二言語習得についての知識とその活用					
2-1-2-1	4.03	1.01	2-1-2-4	4.03	0.90
2-1-2-2	3.94	0.97	2-1-2-5	3.92	0.93
2-1-2-3	3.91	0.93	2-1-2-6	3.70	0.97
「授業実践」					
(1) 指導技術					
2-2-1-1	3.65	0.93	2-2-1-3	3.56	1.00
2-2-1-2	3.53	0.96			
(2) 授業づくり					
2-2-2-1	3.97	0.85	2-2-2-4	3.74	0.96
2-2-2-2	3.86	0.90	2-2-2-5	3.61	0.92
2-2-2-3	3.71	0.85			
[2] 外国語に関する専門的事項					
「授業実践に必要な英語力と知識」					
(1) 授業実践に必要な英語力					
3-1-1-1	3.67	0.94	3-1-1-3	3.71	0.95
3-1-1-2	3.56	0.99	3-1-1-4	3.55	0.92
(2) 英語に関する背景的な知識					
3-1-2-1	3.70	0.90	3-1-2-3	3.79	0.88
3-1-2-2	3.67	1.03	3-1-2-4	3.86	0.76